

理科のおもしろさを伝える

「なぜ、なぜ」

思い起こせば小学生のときから自然事象に興味をもっていました。なぜ雪がとけたら水になるのか。なぜボールを投げたら落ちるのか。なぜ。なぜ。それらの疑問が理科の授業を受けるたびに一つずつ解決されていきました。その度に理科の魅力にどっぷりとはまりこんでいきました。

高校生では、物理、化学を学び、力学や分子・原子レベルの学習をしていく過程で今までの理科の知識が繋がっていきました。「なるほどそういうことか！」つながったときの感動は大きく「自然の理」を解き明かしたような気分になりました。

「おもしろい！深い！もっと知りたい！伝えたい！」

大学受験に際し、正直なところ、理学部や工学部にも興味がありました。教育学部に決めた理由は、「伝えたい」という想いがあったからです。理科のおもしろさを、感動をもっとたくさんの人に伝えたい。そんな想いを伝える場として教育現場を選び、岡山大学教育学部理科研究室に入りました。

大学には、理科のおもしろさをより実感できる環境がありました。教員の方々は、各分野の専門的な知識を教授して下さると共に、研究への情熱を語ってくださいました。課題を追究するために必要な設備・資料についても、高校段階とは次元が違い、非常に充実したものでした。そして何より、自分にとって大きかったのが仲間です。理科が好きな仲間にもまれ、講義や研究の合間や放課後、科学談義をよくしました。素晴らしい環境があったからこそ大学院まで進学して学び続けることができました。

「なんとかせにゃーいけん！」

学生時代にニュースなどで「理科嫌い」「理科離れ」などという言葉をよく耳にしました。なぜ、こんなにおもしろい理科が敬遠されるのだろうかという疑問をもち、なんとかしたいと思いました。そんな経緯があって、教員採用試験の面接では、「理科好きの子どもを育てます！」と豪語してしまいました（笑）。

現場に出ても「理科好きの子どもを育てる！」という目標にぶれはありませんでした。理科の授業に力を入れるのは当然のこととして、他教科においても科学的な小話を入れたり、遊びにも理科を意識したものを取り入れたりしていきました。その小話は大学の先生や先輩から聞いた話で、遊びは大学での理科のボランティア活動からヒントを得ていたものだったりします。

一年間たつと、子どもの意識は「理科めんどくせーし、よーわからん。」から「へー、けっこうおもしろいじゃん。」に変わっていました。理科の魔法にかかったようです。

「ノーベル賞をとれる子を育てる」

現在（2009年）、岡山大学附属小学校で理科の授業を研究しています。子ども達が自然事象に触れたとき、そしてその自然事象を解き明かしたとき、小学生時代の自分の姿が重なります。植物を食い入るように観察して新しいことを発見したとき、予想通りの実験結果が出たとき、いい顔をしています。授業が終わったとき、「先生、もっと実験したい。」こんな声が聞こえてきます。私のクラスの子供達は全員理科が大好きです。やりがいを実感できる瞬間でもあります。

今後もこれから関わる子ども達に理科のおもしろさを実感させていきたいと思っています。そして、いつかは教え子がノーベル賞を・・・、そんな野望を抱いています（笑）。